

豊かな生き方 －人生の〈逃げ場〉を考える

上田紀行 東京工業大学教授・リベラルアーツ研究教育院長

近年の日本社会の息苦しさ、生きづらさの根源はどこにあるのだろうか。そしてその個々人の苦しみと社会の不寛容はどのように関係しているのだろうか。

二年ほど前『人生の〈逃げ場〉 会社だけの生活に行き詰まっている人へ』（朝日新書）を出版したが、そのとたん、多くの知人友人たちから、「これはまさに今の自分のために書かれた本だ」と応答が来たのには驚かされた。それも冗談ではなく皆かなり真剣だ。仕事が辛くてしかたがない。逃げ場がほしい。その切実な思いがひしひしと伝わってきた。

かつての会社も仕事はハードだった。しかしそこには希望があり、支えがあった。みんなで一緒に目標を達成していこうという仲間意識があり、未来への夢があった。それは互いに支え合う大家族的な共同体であった。

しかし時代は急速に支えの意識を失っていった。成果が上がらなければ切られるという不安の中での仕事は、心身ともに大きな疲労をもたらす。そして働く喜びも見い

だすことが難しくなる。

朝の通勤ホームに立って、目の前の満員電車に突進できたのは、その電車の行き先に希望があったからだ。希望が失われ、不安におびえ短期的な成果を出し続けねばならない人生が行き先では、私たちはホームの上で立ちすくまざるをえない。そして電光掲示板の上に今日も流れる「人身事故」の文字がだんだん他人事でなくなっていく。

戦後の日本を支えてきた会社単線社会は完全に行き詰まっている。にもかかわらず、私たちは「会社一神教」から脱することができず、行き場のなさに気づきつつも、そこから逃れることができないでいる。

それに先んじること10年、私は「日本は第三の敗戦を迎えているのではないか」という思いにかられていた。

それは2006年のことだった。世間では「使い捨て」という言葉が流行っていた。そして小泉首相は当選したての小泉チルドレンに向かって、「政治家だって使い捨てにされることを覚悟せよ」と訓示した。落選すれ

ば議員は使い捨てだ、だからがんばれという発言だったが、「政治家だって使い捨て」発言の裏には、国民の多くが使い捨てにされている現実の追認がある。その言葉に大きな憤りを感じざるを得なかった。

しかしその発言直後に行われた世論調査で、まさに「使い捨て」状態に置かれている非正規雇用の若者達、ワーキングプアと言われる貧しい若年層の間の小泉首相の支持率が急騰したと聞かされた。「全ての人を使い捨てだと、正しいことを言ってくれた。われわれだけが使い捨てじゃないんだ」というわけだ。そこは「政府は何でわれわれを使い捨て状態に放置しているんだ！」と支持率が下がるべきところではないのか、私は愕然とした。

そして私は教鞭を執っている東工大の、20歳前後の大学生200人のクラスで「人間は使い捨てか？」と聞いてみた。何と半数の学生が「使い捨てだ」に手を挙げた。私はとてつもなく悲しくなった。20歳の若者にこんな答えをさせてしまう社会は根本的に間違っているのではないか？そして私はこれはもう「第三の敗戦」なのではないかと思ったのだった。

第二次世界大戦の軍事的敗戦が第一の敗戦である。しかし私たちは忍耐強く復興を

成し遂げ、1980年代後半には「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と経済的勝利に酔いしれた。しかし90年代初頭のバブルの崩壊は一転して経済的敗戦という第二の敗戦をもたらした。そしてそれに続く第三の敗戦、それは安心と信頼の敗戦である。それは支えの喪失といってもいい。私の身に何があっても社会は助けてくれない。全ては自己責任とされ、失敗した人間は見捨てられ、使い捨てとなる。そんな社会はもはや社会と呼べるのか。それは心の焼け野原の風景ではないのか。そう思えたのである。

それはもちろん若者達の責任ではない。彼らが物心ついてから20歳になるまで、どんな日本社会を見せられて育ってきたのか。それは私たち年長世代の問題だ。リストラされて絶望していても誰も助けない、経済的効率で生身の人を評価し、儲けの少ない人間はいなくなったほうがいいと言わんばかりの社会を若者達に見せつけてきたのは私たちなのだ。

しかしさらに大きな驚きが私を待っていた。彼ら学生に社会正義と内部告発についての講義をしたときのことだ。「あなたが就職して派遣された東南アジアの工場は有毒な廃液を流していて、下流で住民が病気になり死者も出ている。あなたは工場長にかけあっ

たが、事実を隠蔽することを求められた。同僚たちからも賛意は得られなかった。あなたはどうか？」という問いに対して200人はどう答えたか？ 一、「自分の名前を出して内部告発する」が3人、二、「匿名で情報をリークする」が15人、三、「何もしない」が残りの180人だった。その結果に私が「君たち、自分の工場のおかげで人が死んでいるんだよ！」と問うても、大多数の学生たちは隣同士で顔を見合わせて「何もするわけないよな」とうなずき合うのだった。

自分の勤めている企業の垂れ流す毒物で関係のない人が死んでいても、自分はそれを止めようともしない。そんな若者を育ててしまう教育を教育と呼んでいいものか。そして社会正義の滅んだそんな国に対して誇りを持つことができるのか。大きな衝撃とともに、私はそのとき誓った。私が退職する時には、人間を使い捨てと思う若者、他人の苦しみより自分の保身を選ぶ若者を無くそうと。

使い捨てと保身、それは実は表裏一体のものだ。いちど使い捨てになってしまえば全てが自己責任とされ誰も助けてくれない。そんな社会では誰もが利己的な保身に走る。社会に「支え」がなくなったとき、正義もまた滅びるのである。他人の苦しみを我がことのように共感する感性は死に絶え、むしろ他者の苦しみを放置し、喜ぶような不

寛容な社会がそこには広がっていく。

自分の会社の工場の有毒廃液のために一般市民が死んでいても、自分の保身のためにその事実を隠蔽するという。そんな社会はとうに終わっている。そしてその責任はそんな日本社会を子どもたちに見せ続けた私たち大人にある。

さて、その日本社会の支えのなさ生きづらさからの解放のために、まずはひとりひとりが「逃げ場」を持つことこそが必要である。それはまずは辛い現実から逃れ、自分の安心と健康を回復する場である。しかしそれだけではない。逃げ場を持つことで、今まで単線だった人生を複線化することが大きな意味を持つ。

「逃げ場」というと、非常に後ろ向きなイメージを持たれるかもしれない。しかし逃げ場を持つことは、むしろクリエイティブな行為である。逃げ場で私たちは仕事とは別の生きる意味、精神的な満足感を発見する。会社的な価値に覆われた人生では、会社での評価に人生の幸福度が完全に依存してしまう。それは自立した人間とは到底呼べず、自ら歯車になり、ロボットとなる人生だろう。そこからの解放こそが必要なのだ。

「逃げ場」は、まずは年に1回は二週間くらいの有給休暇を取ることでだろう。これま

での休暇は仕事のために心身を休めるという「単線化」した休暇だった。そうではなくて、自分が損得抜きでワクワクすることは何か、人生のエネルギーの根源はどこにあるのかといった、自分の生きる根源を見つめ直すような休暇である。1回の休暇で見つからなくても、今年は旅行、翌年は芸術、その次の年は資格取得で、次はボランティア・・・とか、何年もやっていけば、だいたい自分のやりたいことは分かってくる。そして「定年までにまだ15回、二週間の休暇が取れる」と思うだけで、既にかんりの「逃げ場」効果が生じてくるはずだ。そして定年後の人生にも確実に役に立つ。

「自分がいなくなったら職場が大混乱する」と考える人が多い。しかし休暇から戻ってきて、何事もなく職場が回っているを見れば、それもまた会社単線主義からの脱出のきっかけになるし、そこで現場が本当に困っている部分があれば、そこそが自分自身の交換不可能な領域なのだと気づくこともできるだろう。

人生の創造的な逃げ場は、多くの社会においては、宗教や地域社会が担ってきたものでもあった。しかしかつては社員を絶対見捨てないという意味で神や仏は会社にいた。祭や娯楽も会社ぐるみで会社が地域社

会であった。しかしそうした会社への一元化はもはや私たちを守らない。ひとりひとりが様々な逃げ場を自分で確保し、支えと生きる意味の保険をかけておくことが、豊かな人生への道を切り拓くのである。

会社に価値を一元化し、自己を犠牲にして働く人が多くなれば社会が豊かになるというのは大きな誤解だ。「逃げ場」を持った人たちが増えれば、逆に会社も社会も活性化し、豊かになる。幸せそうに生きる人が増えれば、社会は明るく幸せなものになる。その当たり前の事実には私たちはそろそろ気づくべき時だろう。

地域社会の再活性化はしかしながら人間関係の「しがらみ」を再び引き受けることでもある。近所づきあいの面倒くささから逃れて自由な個人になりたい。それは地域共同体を崩壊させる大きな要因になってきた。しかしここではその共同体のしがらみをあえて引き受けるという覚悟が必要になってくる。それは単に昔に戻るというのではなく、「しがらみを引き受けつつ、より豊かに生きていく」という再選択の態度であり、再帰的な意識をもった決断となるだろう。無意味なしがらみを軽減しつつ、人々が結びあい支え合うことの喜びと安心を心から享受するような、新しい絆のありかたが求められているのである。

自分が辛くなったときに逃げる場を持つ。そしてそれとともに社会における「支え」を可視化することも大きな意味を持つ。

東日本大震災はその意味で、若者達の意識に大きな影響をもたらした。震災三ヶ月後の2011年6月、私は200人の学生に同じ質問を試してみた。劇的にその回答が変化した。一、「自分の名前を出して内部告発する」が30人、二、「匿名で情報をリークする」が100人、そして三、「何もしない」が70人。2006年のそれぞれ3人、15人、180人から、大逆転が起こった。そしてその一年後、私は揺り返しが起こっているのではとドキドキしながら同じ質問をした。結果は、50人、120人、30人であった。情報の隠蔽は許さないという姿勢が学生にますます広がっていたのである。

それは明らかに福島第一原発事故の影響である。原発には危険性があるということを知りながら、意図的に隠蔽する、あるいは保身のために言い出せないという、まさに2006年の学生たちが選んだ態度が原発の周辺には蔓延していた。そしてその過ちによりどれだけ巨大な災厄がもたらされたか。それを目の当たりにした学生は、もはや情報の隠蔽を選ばなかった。自分の保身よりも社会正義を選ぶという選択が大多数となったのである。

また東日本大震災の被災地の救援に携

わった多くの人々の姿が若者たちの意識を変えたことも見逃せない。自衛隊員から行政の人々、数多くのNPOやボランティア達が被災地と被災者のために行動している姿は、この社会にもまだまだ困窮している人を救う力があるのだということを私たちに実感させた。この社会にはまだ「支え」があるのだということを、私たちはあらためて認識させられたのである。

困窮している人を誰かが救おうとしているとき、救われているのは困窮している人たちだけではない。その姿を見て育つ子どもたちもまた救われている。人間は使い捨てなんかではない、あなたも人生で苦しむことがあっても、そこには必ず救いがある。そして正義感に燃えて間違ったことを間違っていると、一部の人からは批難されることはあっても、社会全体は必ずあなたの勇気と正義感を褒め称えるだろう。そうしたメッセージがどれだけ若者達を励ますことだろう。

そうした場合は単に震災の復旧の場だけではなく、至るところに生まれつつある。様々な社会問題に対処するために生まれたNPO、従来の葬式と法事の仏教から一步を踏み出そうとしているお寺の活動、若者達の相互のコミュニケーションを重視する新

しい教育などは、どれも支え合い助け合う場を生みだそうとする試みでもある。

そしてそのことに励まされるのは若者達だけではない。私たち大人世代にとってもそれは大きな支えとなるだろう。2026年には、その年の出生者数77万人に対して死亡者数155万人と、誕生祝の二倍の葬式を出す社会が私たちを待ち構えている。もちろん全てのお年寄りがぼっくりと逝くわけではなく、多くは病を得て長期のケアが必要だ。その状況で「人間は使い捨てだ」という思想が蔓延していたとき、何が起ころうか。

若者達に芽生えた支えと社会正義への思い、それを大人社会がまた潰してしまうようなことが起これば、その報いを受けるのはまさに年長世代に他ならない。それは誰もが幸福になることができない、不幸の連鎖の悪循環である。

問われているのは年長世代の勇氣ある行動だと言えるかもしれない。自分の保身に汲々とする姿ではなく、社会の困窮に立ち向かい、良き未来を創り出そうとする気概ある姿をどれだけ若い世代に見せることができるか。「第三の敗戦」に導いたのが私たちならば、そこからの復興もまた私たちの責務である。焼け野原と化した街をかつて復興させたように、私たちは心の焼け野原の風景を今こそ書きかえていかなければなら

らないのだ。

それは案外楽しい復興作業となるかもしれない。ひとりひとりが自分の「逃げ場」を確保し、そこで自分と触れあい、仲間と触れあい、自分の生きる喜びを実感し、そして苦しみを互いに支え合う。それは私たちの生きる意味を回復させ、仲間との絆を回復させ、生きている実感に満ちた毎日を復活させる道へと私たちをひらいていく。そのプロセス自体が私たちの、そして私たちの社会の喜ばしい復興となるだろう。

参考文献

- 上田紀行『がんばれ仏教！—お寺ルネサンスの時代』（NHKブックス、2004年）
- 上田紀行『生きる意味』（岩波新書、2005年）
- 上田紀行『「肩の荷」をおろして生きる』（PHP新書、2010年）
- 上田紀行『人生の〈逃げ場〉 会社だけの生活に行き詰まっている人へ』（朝日新書、2015年）
- 上田紀行『人間らしさ 文明、宗教、科学から考える』（角川新書、2015年）

プロフィール……………
うえだ・のりゆき 1958年東京生まれ。東京大学大学院博士課程修了。愛媛大学助教授、東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻准教授を経て、2012年2月より現職。国際日本文化センター助教授（94～97年）、東京大学助教授（2003～2005年）を併任。専門は文化人類学。特に宗教、癒し、社会変革に関する比較価値研究。著書に『人間らしさ 文明、宗教、科学から考える』（角川書店、2015年）、『人生の〈逃げ場〉 会社だけの生活に行き詰まっている人へ』（朝日新書、2015年）、『生きる覚悟』（角川SSC新書、2011年）他多数。